

行為におけるシンボルの機能 ——パーソンズのシンボリズム論再考——

徳安 彰

パーソンズのシンボリズム論は、理論的なまとまりを欠くために、これまであまりとりあげられてこなかった。しかし、それは、行為理論との関連で、今なお重要性を保っており、体系的にみなおされる必要がある。パーソンズのシンボル概念は、モリスの記号論と新行動主義心理学に由来し、実用論的な文脈で用いられている。一人の行為者の行為の場合、シンボルの機能は、行為者の志向のコントロールにある。複数の行為者の相互行為の場合、その機能は、コミュニケーションすなわち相互コントロールの媒介にある。重要なことは、この実用論的なシンボル概念を、システム理論と結びつけることである。それによって、パーソンズのシンボリズム論は、有意義な方向へと展開されるであろう。

はじめに

タルコット・パーソンズのシンボリズム論は、彼の社会学理論の重要な柱のひとつであるにもかかわらず、これまであまりとりあげられることがなかった。

その理由のひとつは、パーソンズのシンボリズム論自体が、理論的なまとまりを欠いていたことである。初期の『社会的行為の構造』から晩年の『行為理論と人間の条件』に至るまで、symbol, symbolic, symbolism, といった言葉は、常にキーワードとして頻出してくるにもかかわらず、その意味は、しばしば曖昧で拡散的である。また、それらの言葉が用いられる理論的文脈もさまざま、行為理論、文化システム論、メディア論など多岐にわたっている。このため、パーソンズのシンボリズム論は、理論的な定式化を容易にうけつけないものとなり、彼自身によっても、十分にまとまった形では論じられることがなかったのである。

もうひとつの理由は、パーソンズの一般理論構築の試みを継承した社会学の諸理論の展開の中で、シンボリズム論が何ら中心的な役割を担

わなかったことである。ミクロな行為理論における議論の中心は、価値の問題であり、パーソンズ自身に関しては、パターン変数の問題であった。また、マクロな社会システム論における議論の中心は、システムの構造と機能、均衡と変動の問題であり、パーソンズ自身に関しては、AGIL 図式の問題であった。いずれにしても、シンボリズムの問題は、せいぜい周縁的な位置づけしか与えられてこなかったのである。

しかし、人間行為とその所産としての社会現象を扱う社会学理論にとって、その意味の側面を無視することはできない。意味の問題は、ウェーバーやデュルケム以来、常に社会学におけるひとつの中心的問題である。そして、意味の問題を記号の問題へと展開させていくと、とりわけシンボルとシンボリズムが重要な理論的意義を持つてくる。ここに、パーソンズのシンボリズム論が見直されるべき、理論的根拠がある⁽¹⁾。

本稿では、まずパーソンズのシンボルとシンボリズムの概念について考察し、次に行為理論の文脈の中でのシンボリズム論について考察す

る。とくに、彼のシンボル概念が、チャールズ・モリスの記号論と新行動主義心理学の影響を強く受け、実用論的な文脈で用いられている点に注目し、それをシステム論的に読みかえることによる新たな理論的展開の可能性について論じる。

1. シンボルとシンボリズム

まずはじめに、シンボリズムとは何か、について述べよう。ひとことでいえば、シンボリズムとは、シンボルを用いた表現行為である。だが、シンボルの概念をどう考えるかによって、シンボリズムの意味もおおざと異なってくる。ここでは、シンボリズムを狭義のものと広義のものにわけて考えることにする。

狭義のシンボリズムは、狭義のシンボル概念にもとづいている。狭義のシンボルとは、能記（シニフィアン）と所記（シニフィエ）が、本来まったく異なる二つのカテゴリーに属し、それが何らかの直観的飛躍によってアナログカルに関係づけられた記号である。したがって、シンボルの記号論的な機能は、隠喩（メタファー）にある〔Leach, 1976：訳 P. 34〕。

このような意味でのシンボリズムは、行為における手段—目的関係の中にみることができる。パーソンズによれば、手段—目的関係は、内在的なものと象徴的なものに区別することができる。内在的手段—目的関係は、手段と目的の関係が科学的知識によって示される合理的なものであり、象徴的手段—目的関係は、手段と目的の関係が、科学的見地からは非合理的なものである〔Parsons, 1935〕。象徴的手段—目的関係にもとづく行為が、ここでいう狭義のシンボリズムであり、その典型は呪術や宗教儀礼である。すなわち、象徴的手段—目的関係にもとづく行為は、それ自身で完結している目的達成行為な

のではなく、むしろ隠喩として何らかの信念や価値を表現しているのである⁽²⁾。

隠喩としてのシンボリズムはまた、人間の認知的な営みの中にもみられる。それは、パーソンズが媒介的シンボリズム（intermediate symbolism）とよぶものである。たとえば、科学的知識という信念のシステムにおいては、陽子や電子は極小の球形の粒子であり、原子は極小の太陽系である、と考えられてきている。また、宗教的な信念のシステムにおいては、神は長いあごひげのある老人であるとか、悪魔には角と尻尾がある、と考えられている。この二つは、行為における認知的志向のシステムにおいて不可欠な、具体的イメージの提供という点では、全く等価な心理的機能をはたしているのである〔Parsons, 1951：訳 PP. 371—372〕。

一方、広義のシンボリズムは、広義のシンボル概念にもとづいている。広義のシンボルとは、能記と所記を関係づけるコードが人為的な規約性にもとづくような記号一般である。このようなシンボルの考え方は、カッシーラー、ランガー、モリスら哲学者の記号論から生まれた。およそ人間の精神活動や行為のすべては、この広義のシンボルの使用によって特徴づけられるのである。

パーソンズのシンボリズム論も、その理論的本質は、広義のシンボリズムを扱っている点にある。そこで、以下は広義のシンボリズムの文脈で、パーソンズのシンボル概念を検討することにしよう。

パーソンズは、シンボル概念を次のように定義する。

シンボルとは客体である——自然的客体の場合もあれば、社会的客体の場合もあり、さらに出来事や具体的客体の様態、あるいはこ

これらのものごとの集まりないし複合の場合もある——が、シンボル—客体はシンボルである限り、1人ないし1人以上の行為者にとって一定の意味をもったものであり、当の客体そのものとは別個の有意味なものごとを指示する。ある客体がサイン（ないしシグナル）ではなくて、まさにシンボルであるためには、そのもつ意味があるレベルの一般性を獲得していなければならない——ここでそのレベルを特定化してみる必要はないが〔Parsons, 1964: 訳 P. 50〕。

このシンボル概念の特徴は、意味の一般性にある。一般化された意味の成立は、心理学において概念形成とよばれるが、パーソンズは、新行動主義の心理学者オズグッドの媒介過程モデルと同形の説明形式で、この概念形成すなわちシンボル形成の過程を、発生論的に論じている。

まず、オズグッドのモデルは、次のようなものである（図1）。刺激 \dot{S} は反応 R_T をもたらすが、 \dot{S} にかわる記号 \boxed{S} は R_T の一部を代表する心理的媒介反応 r_m をもたらす。 r_m は自己刺激 s_m をひきおこし、その結果 \boxed{S} の反応として R_x をもたらす。このとき R_T を代表して s_m をひきおこす心理的な代表的媒介過程 $r_m - s_m$ が記号の意味とされ、 \boxed{S} と r_m の連合形成がサイン学習と呼ばれる。さらに、いくつかの記号（ $\boxed{S_1}$ 、 \dots 、 $\boxed{S_n}$ ）との反復連合によって、 r_{m1} 、 r_{m2} 、 \dots 、 r_{mn} から r_{ma} に意味が移転されることによって、抽象的記号 $/S/$ が成立する。これはアサイン学習と呼ばれる。 $/S/$ の意味 $r_{ma} - s_{ma}$ は、 $r_{m1} - s_{m1}$ 、 $r_{m2} - s_{m2}$ 、 \dots 、 $r_{mn} - s_{mn}$ からの一般化・抽象化ないしこれらの組織化によって形成されている⁽³⁾。

これに対してパーソンズは、シンボルとしての母親という客体が成立する過程を、次のように説明している。まず子供には食欲、暖かさ、安全といった個々の欲求があり、食欲については母親の胸やベットといった個々の客体が対応している。これらの客体に、食べ物の準備をする母親の行為や食べ物を与えている間の母親の有機体的特徴（子供を抱く胸や腕）が記号として結びつく。個々の客体が第一次のカセクシスを受けるのに対して、これらの記号も第二次のカセクシスを受ける。やがてこれらの記号は、一般化の過程によって母親という一個の客体に関して複合的に組織化される。一方カセクシスもそれに対応して組織化される。こうして母親という客体とそれに対する愛着というカセクシスが成立する。この過程をオズグッドのモデルで表わすと、図2のようになる。ここで母親はまさにシンボルであり、その行為はすべて愛や称賛を意味するものとして一般化して受けとられ、媒介過程によって、愛着という一般化された反

（サイン学習）

（アサイン学習）

図1. オズグッドの媒介過程モデル

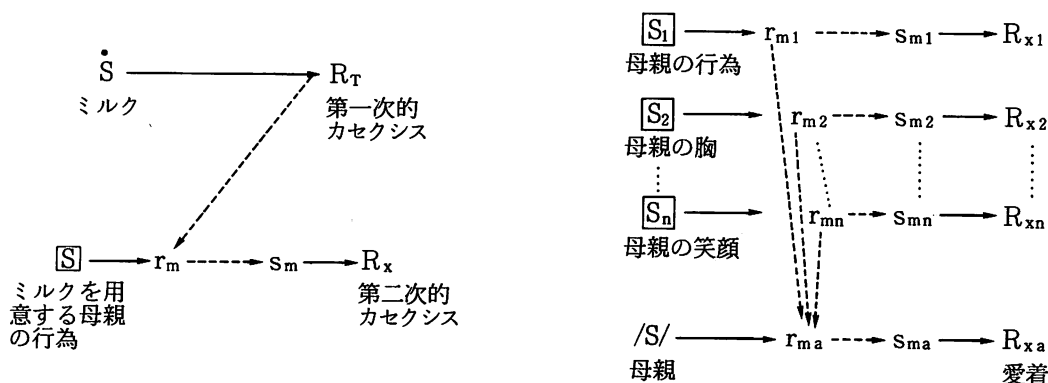


図2. パーソンのシンボル形成モデル

応をひきおこすのである〔Parsons, Bales, & Shils, 1953 : PP.39-41〕〔Parsons & Shils (eds.), 1951 : 訳 P. 207〕。

シンボル形成における一般化・抽象化の過程は、同時に分化の過程を伴っている。なぜなら、個別の諸対象のさまざまな情報を選択的に一般化・抽象化することは、同時にその選択される情報の内容がAであってBやCではないという識別と同定を含んでいるからである。例えばリンゴや血や赤ワインから赤という色彩に関する概念が形成されることは、同時にそれが青や黄ではないというふうに識別・同定されることを含意している。このような一般化・抽象化と識別・同定という二つの相補的過程は、心理学者トールマンのいう認知図 (cognitive map) 作成の両側面をなしている〔Parsons & Shils (eds.) 1951 : 訳 P. 200〕。

この分化の過程を説明するのに有効なのが、二項対立という概念である。この概念は、構造言語学に由来し、構造人類学に应用されることで、構造主義のひとつの中心原理となった。パーソンズも、この二項対立からなる構造原理を二分化の原理 (the principle of binary differentiation) と呼び、生命体システム (living

system) の根本原理とみなしている (Parsons, 1982 : P. 59)⁽⁴⁾。

二分化の原理は、社会的客体の概念の分化過程にあてはめられる。子供にとって母子一体性の原初的段階からの第一の社会的客体の分化は、私 (me) / あなた (you) という二項対立である。この二項は一般化されて我々 (we) という概念を形成するが、これはまた新たな二項対立、我々 / 非我々 (non-we) すなわち彼ら (they) を生む。そしてこの二項がさらに一般化されて、世界という概念になるのである〔Parsons & Bales, 1955 : 訳(上) P. 95〕。

この原理は、社会化過程における役割概念の形成にもあてはまる。母子一体性から、まず力に関する優位 / 劣位の分化が生じる。これに道具性 (instrumentality) / 表出性 (expressiveness) という分化が加わって、父・母・息子・娘という家族の基本的役割構造が形成される。これにさらに普遍主義 / 個別主義、遂行 / 資質という二組の二項対立が順に加わって、十六の役割概念のパターンが形成されるわけである〔Parsons & Bales, 1955 : 訳(上) PP. 75-86〕。

2. シンボルと行為

1. で述べたシンボルの定義にもすでに含意さ

れていたことだが、パーソンズのシンボル概念は行為の関係枠組の中で定義されており、記号論的にいえば実用論 (pragmatics) の文脈で用いられることが多い。これは、彼のシンボル概念がモリスの記号論の影響を強く受けていることによる。パーソンズは、シンボルについて、行為理論の文脈で次のように述べる。

我々は、モリス（そして勿論その他大勢）に従って、次の言明から出発しよう。すなわち、シンボルは、サインというより大きな部門の特殊なメンバーであり、行為論的に言えば、ある点において行為過程と結合している状況的客体または事象、またはその側面である。「結合している」という言葉が示しているのは、シンボリックな客体や事象は、問題となっている特定の文脈においては、第1次的で本来的に重要な目標客体やカセクシスの客体ではない、ということである。他の文脈においては、そのような客体や事象の方がシンボリックな客体であるかもしれないのではあるが。他の多くの場合と同様に、この関連においても、準拠点をきちんと保つことが決定的なのである。

この観点からみると、シンボルは、いわば、行為者の動機的動因または欲求性向と目標客体または目標状態——すなわち、関連する行為過程において、動機からみると第1次的なカセクシスの（諸）客体との関係——との「間にぶらさがっている」と考えられるべきである。シンボルは、必然的に両方と「結合している」〔Parsons, Bales, & Shils, 1953 : P. 32〕。

ここで、シンボルは行為者と第1次的なカセクシスの客体との間を媒介し、第1次的なカセクシスの客体にかかわって、行為者の内部にある

欲求性向をひきおこすことによって、行為者の志向を目標となる客体に向けさせる〔Parsons & Shils(eds.), 1951 : 訳 PP. 252-255〕。すなわち、シンボルは行為者の志向をコントロールするのである。

ここで、客体に対する主体（行為者）の志向は、例えば次のように分類される。ひとつは行為者の欲求充足にかかわる動機志向であり、その内容は、(I)認知的様式——欲求性向との関連からの客体の認知、(II)カセクシスの様式——客体に対するカセクシスの投出、(III)評価的様式——全体としての欲求充足の最適化のためのエネルギーの配分、の三つに区別される。もうひとつは、一定の選択規準（価値標準）へのコミットメントにかかわる価値志向であり、その内容は動機志向に対応して、(I)認知的様式——認知的判断の妥当性を判定する諸標準へのコミットメント、(II)鑑賞的様式——カセクシスの投出の適切性と一貫性を判定する諸標準へのコミットメント、(III)道徳的様式——行為を行為システム全体に及ぼす影響の見地から判定する諸標準へのコミットメント、の三つに区別される〔Parsons & Shils (eds.), 1951 : 訳 PP. 95-98〕。ここで重要なのは、価値志向によってコミットされる価値標準である。価値標準は、動機志向の諸様式に対して、一定の選択規準を与え、それをコントロールするシンボルとみなすことができる。従って、シンボルによる行為者の志向のコントロールとは、行為者が持ちうる複数の志向の可能性からの選択のコントロールに他ならない。

シンボルによるコントロールという見地から、選択の問題を最も一般的な形でモデル化したのが、パターン変数によるシンボリズムである〔Parsons, Bales, & Shils, 1953 : PP. 31-62〕。

パーソンズによれば、そもそもシンボルは、客体の状態を指示する認知的意味と、行為者（主

体)のカセクシスを指示する表出的意味を持っている。このうち、認知的意味がもっぱら優位を占めるものが認知的シンボル、表出的意味がもっぱら優位を占めるものが表出的シンボルと呼ばれる。個々の認知的シンボルや表出的シンボルとその意味は、それぞれ認知的標準または鑑賞的標準によって規制されているが、その組織化は評価的シンボルによるものなので、結局道徳的標準によって規制されている。その組織化のパターンを提供するのが、パターン変数に他ならない。

パターン変数による、シンボルとその意味の組織化の概要は、図3のように示される。まず、普遍主義/個別主義と業績本位/属性本位の二組は、認知的シンボルとその意味の組織化にかかわる。普遍主義は、指示される客体を、共通

の性格によって、また準拠点としての主体に対する特定の関係とは独立に、一般的ないし普遍的なものとしての相互関係によって組織化するのに対して、個別主義は、客体を、準拠点とみなされる特定の主体に対する特定の関係によって組織化する。また業績本位は、客体を、その動機的意図の結果としての遂行という観点から組織化し(従ってこれはすぐれて社会的客体にかかわる)、属性本位は、客体を、その動機的意図とは無関係な性能という観点から組織化する。

一方、限定性/無限定性と感情性/感情中立性の二組は、表出的シンボルとその意味の組織化にかかわる。限定性は、客体の限定された性質に関して、指示されるカセクシスを組織化し、無限定性は、ひとつの客体まるごとに関してカセクシスを組織化する。また、感情性は、ある

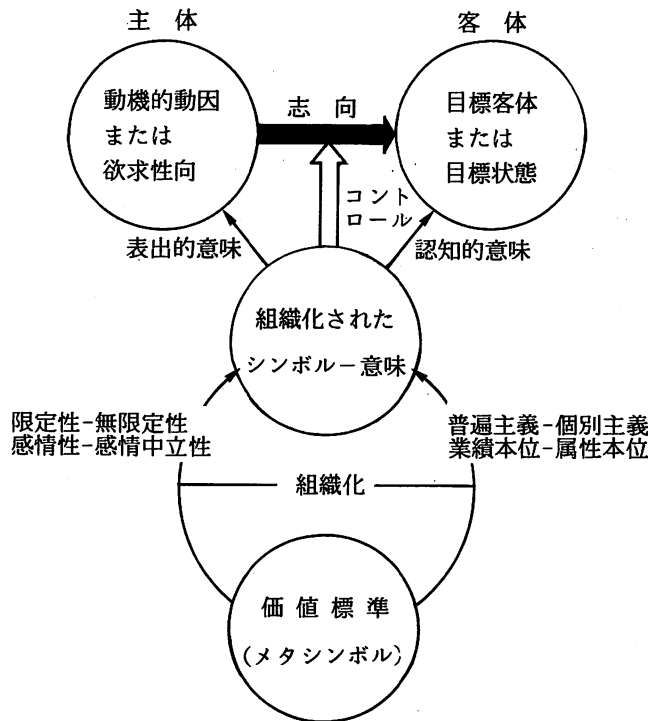


図3. シンボルによる行為の志向のコントロール

時点、ある機会においてカセクシスを注ぐ（欲求を充足する）ようにカセクシスを組織化し、感情中立性は、ある時点ある機会においてはカセクシスの投出を抑止するようにカセクシスを組織化する。

そして、残された第五のパターン変数である自己志向／集合体志向は、これらすべての組織化が、自己中心的な観点から行なわれるか、それとも集合体の制度という観点から行われるかにかかわっている。

この、行為における選択の問題は、たとえばニクラス・ルーマンによって、複雑性とコンティンジェンシーという概念によって、最も抽象的な形で再定式化されている。すなわち、複雑性とは、選択肢として複数の可能性が存在することであり、コンティンジェンシーとは、その可能性が単に可能性にすぎず、それゆえその可能性が実は存在しなかったり、別の可能性が存在したりしうることである〔Habermas & Luhmann, 1971：訳 PP. 37-38〕。

しかし、ルーマンの場合には、パーソンズにおいて中心的な位置を占めていたシンボルが、副次的な位置づけしか与えられていない。この点、よりパーソンズに近い形でシステム論的な定式化をはかったのが、アコフとエメリーである。

アコフとエメリーによれば、行為者は有目的状態にあるシステムとしてとらえられ、その要素は、システムがとりうる複数の行為の方向、それが特定の結果あるいは目的を実現する確率、結果の価値という三つからなっている。そして、シンボルは、可能な行為の方向を変化させることによって情報を伝え、能率を変化させることによって教示し、価値を変化させることによって動機づけを行う、という形でシステムをコントロールするのである〔Ackoff & Emery, 1972〕。

アコフとエメリーは、パーソンズには全くふれていないが、彼らの定式化は、パーソンズのシンボル論のシステム論的よみかえに関する、ひとつの方向を示唆するものといえる。

3. シンボルと相互行為

1.で述べたシンボルの定義にみられる意味の一般性は、一行為者における一般化だけでなく、複数の行為者間における一般化をも含んでいる。シンボルは、状況の特殊性を離れて通用する意味の一般性を獲得することによって、個人的なものから社会的なものへと移行する。このようなシンボルシステムの成立によって、はじめて広範なコミュニケーションが可能になる。そして、そのようなシンボルシステムが、文化システムと呼ばれるものである。この文化システムの成立を、ダイアディックモデルによって、発生論的に考えてみよう。

相互行為における基本的な状況は、図4に示された通りである。まず相互行為とは、そもそも各行為者が自らにとって必須の欲求充足を得るための相互依存関係として成立している。これは、相互行為の相手となる他者に関する何かある物事が、主体としての行為者（自我）にとって第一次的なカセクシスの客体であるということの意味する。だが、カセクシスの客体が行為者という社会的客体の場合には、非社会的客体とは根本的に異なった事情が加わる。それは、客体としての他者もまた同時に主体となって、本来の主体である行為者を客体とみなしてそれに志向するという事情である。それゆえ、状況は図4にあるように、二重の志向を含んだものとなる。こうなると、状況は二重の条件依存性（double contingency）という特別の性格を持つことになる。これは自我の欲求充足が、他者がやるかもしれないしやらないかもしれないこ

とに依存し、しかもその他者の行為には、そもそも何かあることをやるかどうか、またそれをどのようにやるかについての不確実性が存在しているという事情を表わしている。

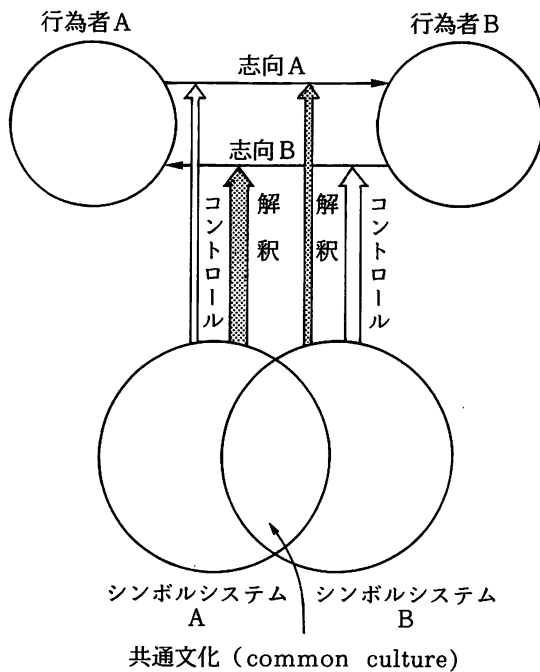


図4. 相互行為とシンボルシステム

そうすると自我は、こうした欲求充足に関する不確実性を減少させるために、一方で他者に対して自らの欲求充足のための行為の遂行を期待して、それを自らの行為の中にシンボリックに表現することで他者の行為をコントロールしようとし（すなわち役割期待）、また他方で他者の出方を知るために他者の行為を解釈しようとする。（他者に対して期待されるものは、遂行でなくて属性としての性能でもよいのだが、もっぱら性能しか期待しないのでは、他者は社会的客体として固有の意義を失ってしまうことになる。）他者の行為は自我の志向に対するサンクションであるから、他者の行為の解釈とは、自我の志向に対するフィードバックに他ならない。

こうした自我の役割期待の表現と他者の行為の解釈は、自我のかかっているシンボルシステムによってコントロールされている。こうした事情は、また他者の側にも全く対称的な形で存在している。かくして相互行為において、二人の行為者は、互いに相手に対して自らの抱く役割期待を表現し、相手の表現した自分への役割期待をサンクションとして解釈するわけである。行為者は、相手の与えるサンクションがプラスのものであれば、自らの欲求性向は充足されるから、この相互行為関係を維持しようとするし、サンクションがマイナスのものであれば、欲求は不充足となるので相互行為関係から撤退するであろう。従って相互行為関係が維持されるためには、双方の行為者が共に相手からのサンクションをプラスのものであると解釈することによって、それぞれの欲求性向が充足されることが必要である。これが互酬性の原理（principle of reciprocity）であり、この互酬性が満たされていることによって、相互行為過程は社会的交換の過程であるとみなされるのである。ここにおいて、期待の相補性は、相互行為にかかわる行為者がそれぞれ自らの期待した欲求性向を充足しているという意味において成立している。

だがここまでは、まだ各行為者のシンボルシステムがかみ合っているとは言えない。自我の役割期待を他者がどのように解釈したのか、また他者は本来どのような意味のサンクションを与えたのか、こうしたことは一応無関係に、ともかくも自我の欲求は充足されたのであり、他者の側もまた同様なのである。互酬性が満たされている限りにおいて、事実的秩序は確かに成立しうる。だがこれでは状況の不確実性は何ら解消されていない。こうした事実的秩序は、言わば幸福な誤解に基づく秩序にすぎないのである。この不確実性はいかにして解消されるの

であろうか。

まず最初に、相互行為過程は、上述の議論から明らかのように、そもそもシンボルによるコミュニケーション過程であるという側面をもつ。シンボルは表象との結合が恣意的であるが故に、様々な意味を内包する可能性を持っている。しかしそれがコミュニケーションのメディアとして機能しうるとしたら、その時既にシンボルには、コミュニケーション過程の関与者にとって共通の意味が内包されていると言わねばならない。言語シンボルにおいては、辞書的な意味がその共通の意味に相当するであろうし、非言語シンボルにおいても言語の辞書的な意味に相当する共通の意味が存在するであろうと考えられる。ここに、相互行為における各行為者のシンボルシステムのかみ合いの最初の契機がある。これを行為者の側から見れば、行為者はコミュニケーション過程に関与しようとする限り、メディアとして用いられているシンボルシステムの内包する共通の意味を認めるという意味において、最低限の共通の規範に同調せねばならないということになる〔Parsons, 1951: 訳 P. 17〕〔Parsons, Bales, & Shils, 1953: PP. 38-39〕。こうした共通の意味の成立条件は、認知的側面においては、各行為者にとって同一のシンボルが同一の指定された客体や文脈について同一の性質を指示するということであり、表出的側面においては、同一のシンボルが同一の感情（すなわち充足もしくは阻害の期待）か、少なくとも相補的な感情を各行為者にひきおこすということである。

こうして事實的秩序にまつわる状況の不確実性を解消する第一歩が踏み出された。各行為者のシンボルシステムがかみ合うほど共通文化の占める範囲は大きくなり、それだけ不確実性は解消されるのであるが、それは既に2.で論じた

一般化過程によって促進される。つまり自我の志向する客体としての、他者についての何かある物事は、個々ばらばらの原初的狀態から次第に様々な第一次的カセクシスの客体とサイン客体がシンボリックに結合して組織化されることによって、他者（alter）という一個の複合的な客体を形成するようになり、一方でそれに対応する自我の欲求性向も組織化が進んでカセクシスが一般化されるわけである。これによって、共通文化は単にその範囲を広げるだけでなく、一般性の高いレベルでパターンの一貫性を持った統合を達成するようになる。こうして形成された文化システムのパターンの一貫性がそれが規範的秩序に他ならない。このパターンとは既に先に述べた価値標準のパターンである。従って共通文化によって状況の不確実性すなわち二重の条件依存性が解消される傾向があるということは、それだけ価値標準のパターンによる相互行為のコントロールが貫徹していることを意味する。これが従来制度化（institutionalization）と呼ばれてきた現象の相互行為における発生論的形態に他ならない。この制度化は、各行為者のシンボルシステムのかみ合いによる共通文化の統合という側面と、共通文化による相互行為のコントロールという側面の二つを含んでいる。

相互行為における意味の共通性の根拠となる共通文化は、ダイアディックモデルによって発生論的にみると、以上のような過程によって成立する。しかしここで注意すべきは、ダイアディックモデルが相互行為を考える際の典型というよりむしろ限界的ケースであるという事実である。本稿の発生論的説明では、共通の辞書的意味を持つシンボルシステムだけを前提として、それ以上の共通文化がいかにして成立するかを考察したわけだが、一般にダイアドはより大きな社会システムを自らの環境とする開放システ

ムであり、この環境である社会システムの持つ
共通文化によって課せられた価値や規範を自らの
共通文化の要素として取り込まざるを得ない。
これが本来の意味での制度化である。この上位
の社会システムに対応する共通文化は、特定の
ダイアドをはるかに超越した、歴史的過程の産
物である〔Parsons, 1978〕。従って、相互行為
における意味の共通性の問題は、ダイアドシス
テム内において発生論的に成立する共通文化と、
より上位の社会システムに対応する共通文化の
取り込みという二つの側面から捉えられてはじ
めて十全な回答が与えられることになるだろう。
ルーマンの言葉をかりれば、システムの主体的
選択（行為）と環境による選択（体験）の両
方を等しく視野に収めることによって、という
ことになる〔Luhmann, 1976 : P. 510〕。

おわりに

以上みてきたように、パーソンズのシンボル
リズム論は、行為理論の文脈で一貫して再構成す
ることによって、ある程度まとまった様相をみ
せてくる。

まず、パーソンズのシンボル概念は、カッ
ラー、ランガー、モリスらの哲学者の記号論と
同じく、人間の精神活動と行為の全領域にかか
わる広い概念である。しかもそれは、新行動主
義心理学とモリスの記号論の影響を受けて、ほ
ぼ一貫して実用論的な文脈で用いられている。
この実用論的なシンボル概念は、心理学の行為
理論への読みかえの中で、行為の志向のコント
ロールすなわち複数の行為の可能性からの選択
のコントロールという機能的位置づけを与えら
れている。このコントロール機能は、単一の行
為者の行為においてのみならず、複数の行為者
の相互行為においても不可欠なものである。そ
して、行為や相互行為のコントロールが可能に

なるためには、シンボルは意味の一般性を獲得
することによって、安定したシステムを形成し
なければならないのである。

このようなシンボルリズム論を、行為理論の中
でさらに有効なものにしていくためには、一方
で、アコフとエメリーの定式化にみられたよう
なシステム論的な読みかえをさらに徹底してい
く必要があり、もう一方で、シンボルシステム
そのものについての分析すなわち文化システム
についての分析が必要であろう。

注

- (1) この点で注目してよいのは、構造主義的な立
場から、社会学理論におけるシンボルリズム論の
系譜を辿って、批判的な検討を加えた、ロッシ
の研究である〔Rossi, 1983〕。また、筆者は、
意味の問題からアプローチした一般理論構
築について、自らの構想を論じたことがある
〔徳安, 1985〕。
- (2) 近年の人類学におけるシンボルリズムの研究も、
これと同じ考え方をとっている。たとえば、シ
ンボルリズムの一般理論をめざすスペルベルは、
「私は、用いられた手段が、明示的であれ黙示
的であれ、目的であるものに——それが認識、
コミュニケーション、生産のいずれであるかを
問わず——明瞭に釣り合わないと思われるあら
ゆる活動を、つまりその存在理由が私には捉え
られないあらゆる活動を、象徴的なものとみな
してノートするのだ。簡単にいえば、私がフィ
ールドで用いる基準は、実際、非合理性という
基準なのだ。」と述べている〔Sperber, 1974 :
訳 PP. 19-20〕。
- (3) 心理学における媒介過程モデル自体は、もは
やオズグッドをはるかにこえた地点まで展開し
ている〔坂元, 1970〕。一方、スキナーらのより
極端な行動理論では、この媒介過程モデルは、

経験的に観察不可能なものとして排除されている〔佐藤, 1976〕。

中で, この二項対立の共通性を指摘している〔Rossi, 1983 : P.190〕。

(4) ロッシも, パーソンズと構造主義との比較の

文献

- Ackoff, Russell L. & Fred E. Emery, 1972, On Purposeful Systems, Tavistock Publications
- Habermas, Jürgen & Niklas Luhmann, 1971, Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie, Suhrkamp = 1984 佐藤嘉一・山口節郎・藤沢賢一郎訳『批判理論と社会システム理論』(上), 木鐸社。
- Leach, Edmund, 1976, Culture and Communication, Cambridge University Press = 1981 青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』, 紀伊國屋書店。
- Luhmann, Niklas, 1976, "Generalized media and the problem of contingency" in Jan J. Loubser et.al.(eds.) Explorations in General Theory in Social Sciences, The Free Press : 507-532
- Parsons, Talcott, 1935, "The place of ultimate value in sociological theory" in International Journal of Ethics, vol.45 : 282-316
_____, 1951, The Social System, The Free Press = 1974 佐藤勉訳『社会体系論』, 青木書店。
_____, 1964, Social Structure and Personality, The Free Press = 1973 武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』, 新泉社。
_____, 1978, Social Systems and the Evolution of Action Theory, The Free Press
_____, 1982, "Action, symbols, and cybernetic control" in Ino Rossi(ed.) Structural Sociology, Columbia University Press : 49-65
- Parsons, Talcott & Robert F. Bales, 1955, Family : Socialization and Interaction Process, The Free Press = 1970 橋爪貞雄他訳『核家族と子どもの社会化』(上)(下), 黎明書房。
- Parsons, Talcott, Robert F. Bales, & Edward Shils, 1953, Working Papers in the Theory of Action, The Free Press
- Parsons, Talcott & Edward Shils(eds.), 1951, Toward a General Theory of Action, Harvard University Press = 1960 永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして』, 日本評論社。

Rossi, Ino, 1983, From the Sociology of Symbols to the Sociology of Signs, Columbia University Press

坂元 昂 1970 「学習と思考」東洋編『講座心理学8 思考と言語』, 東京大学出版会。

佐藤 方哉 1976 『行動理論への招待』, 大修館書店。

Sperber, Dan, 1974, Le Symbolisme en Général, Hermann, éditeurs des sciences et des arts = 1979 菅野盾樹訳『象徴表現とはなにか』, 紀伊國屋書店。

徳安 彰 1985 「行為における“意味”と文化システム」『思想』No. 730: 301-315。

(とくやす あきら)